

# 大学生の障がい者スポーツに関する認識

スポーツマネジメントゼミナール 1214151 益子佳歩

## 1. 研究動機・研究目的

2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会に向け、行政は「全員が自己ベスト」「多様性と調和」「未来への継承」の3つを基本コンセプトとして準備にあたっている。その中でも、近年では障がい者スポーツに関する制度や環境の整備に尽力し、障がい者スポーツの普及並びに日本選手団の国際競技力向上を目指している。一方で、障がい者スポーツは健常者スポーツに比べメディア等への露出が少なく、また、国民の認知度も決して高くないという現状がある。佐藤ら(2015)はパラリンピックの認知度は7割を上回っているものの、そのほかの障害者スポーツの国際大会であるデフリンピックとスペシャルオリンピックスの国内の認知度は15%未満と、諸先進国と比較すると非常に低い値であり、年代別のパラリンピックの認知度は男女とも20歳代が最も低い結果となっている。国民の障がい者スポーツへの認知・関心が高くない現在の状況では、行政発の障がい者スポーツへの機運の高まりは2020年東京パラリンピックがもたらす一過性のものとなってしまうのではないかと危惧される。そこで、日本の大学生における障がい者スポーツの認知状況とその要因を調査し、学生の個人的属性との関連性を明らかにしようと本研究に着手した。

本研究の目的は、1) 日本における障がい者スポーツの扱いの移り変わりを明らかにすること、2) 大学生の障がい者スポーツへの関心・認知度を明らかにすることの2点であった。

## 2. 研究方法

本研究の調査方法はスポーツ系の学部所属する大学生を対象とした30項目のアンケート調査であった。神奈川県のあるT大学、千葉県のあるJ大学のスポーツ系の学部在籍する計538名から回答を得た。調査期間は2017年5月19日から6月19日の1か月間とし、Google社のサービスであるGoogle formを用いてWeb上でアンケート調査を行った。データの分析にはIBMのSPSS version 20を用い、記述統計、t検定、相関分析並びに一元配置分散分析を行った。

## 3. 主な結果と考察

今回研究を行ったスポーツ系の学部在籍する学生は、障がい者スポーツ大会の認知において調査した3つの大会すべてで一般よりも高い値を示した。特にデフリンピック、スペシャルオリンピックスの認知の合計(内容を知っている、見たり聞いたりしたことがある程度)が一般と比較し、それぞれ2倍近い値であり、障がい者スポーツの大会を「知っている

る」人が多いことが明らかになった。一方で、運動習慣と各障がい者スポーツ大会の認知には相関がみられず、小堀（2015）が述べた、障がい者スポーツの認知に影響を与える「スポーツ志向」とは運動習慣ではなく、スポーツに興味関心があって学部を専攻していることだと考えられる。また、障がい者スポーツの国際大会の「言葉の認知」と「パラリンピックを会場で直接観戦したい」との間には相関がみられ、それぞれの大会を知っている人ほどパラリンピックを直接観戦したいと考えていることが明らかとなった。また、オリンピック・パラリンピック両大会の観戦志向は一致していた。このことから、障がい者スポーツに関心が高い人ほどスポーツの国際大会の観戦に積極的であることが読み取れる。スポーツを専攻している大学生は、2020年のオリンピック・パラリンピック競技大会のボランティア希望は70%以上と非常に高く、同年代のボランティア参加希望者の割合の2倍以上の値となった。

本研究の結果から、障がい者スポーツ、健常者スポーツ問わずスポーツ系の学部の在籍する学生はスポーツ全般への意欲が高いことが明らかになった。

#### 4. 結論

スポーツ系の学部 に在籍する大学生は、障がい者スポーツ大会の認知、パラリンピック参加対象障害の認知に関しては一般の同年代の回答と大差がない結果であった。パラリンピックは直前に開催されるオリンピックと比較すると観戦希望、ボランティア参加意向のどちらも低いこと、また、スポーツを専攻している学生の中でもスペシャルオリンピックスやデフリンピックに関しては認知度が非常に低いことから、障がい者スポーツはまだまだ注目されていない分野であると推察された。また、パラリンピックとそのほか2つの障がい者スポーツの国際大会の認知度の差の大きさから、パラリンピックは障がい者スポーツというよりイベントとしてとらえられている印象が強かった。障がい者スポーツをきちんと正しく理解した上で、実際にそのスポーツを体験し、トップアスリートの競技を観戦するというステップを踏むことが、今後の障がい者スポーツの認知向上と障害の有無を問わず普及につながっていくのではないかと考えられた。また、今回はスポーツを専攻する学生に絞って調査を行ったため、他の分野を専門とする学生の障がい者スポーツに対するモチベーションや認知要因、より詳細な因子や個人属性等については調査・分析の余地があると感じた。

#### 5. 卒業論文の執筆を終えて

本論文を執筆するにあたり、たった一本の論文を仕上げるだけであったが、たくさんの方々のご協力をいただいた。特に、ご多忙の中、一から論文の書き方、データの扱い方などをご指導していただいた指導教員の小笠原悦子先生、小笠原ゼミの大学院生の方々への感謝は言い表せないほどである。多くの方のお力をお借りし、無事に完成させることができた。そのことを有難く思い今後の自分の人生の糧にしたいと思う。